

「二重生活」★★★★

2 0 1 6（平成 2 8）年 7 月 1 0 日鑑賞<シネ・リーブル梅田>

監督・脚本：岸善幸

原作：小池真理子『二重生活』（角川文庫刊）

白石珠（大学院で哲学を専攻する大学院生）／門脇麦

石坂史郎（出版社に勤める会社員）／長谷川博己

鈴木卓也（珠の同棲中の恋人、ゲームデザイナー）／菅田将暉

篠原弘（珠の担当教授）／リリー・フランキー

三ツ木桃子（教授の恋人、劇団の女優）／西田尚美

澤村しのぶ（石坂の愛人）／篠原ゆき子

石坂美保子（石坂の妻）／河井青葉

春日治江（マンションの管理人）／烏丸せつこ

2 0 1 5 年・日本映画・1 2 6 分

配給／スターサンズ

<テーマは「理由なき尾行」！それは合法？違法？>

本作のテーマは「理由なき尾行」。そんなテーマの小説『二重生活』を書いたのは小池真理子だが、そもそも「理由なき尾行」って一体ナニ？また、個人情報保護法やストーカー規制法等が制定されている今の日本で、それは合法？それとも違法？

ちなみに、4 月 2 5 日に観た『海よりもまだ深く』（1 6 年）では阿部寛扮するダメ男がヘタな探偵業をしていたし、6 月 6 日に観た『後妻業の女』（1 6 年）では永瀬正敏が二股がけをするタチの悪い探偵役を演じていた。

しかして、本作の主人公である哲学を専攻する大学院生の白石珠（門脇麦）に、尾行なんて難しい仕事が務まるの？また、尾行（という危険を伴う行為）をするのは何らかの目的のためとしか考えられないのに、珠が「理由なき尾行」を始めたのは、一体なぜ？

<この教授はかなりヤバそう・・・>

リリー・フランキーは、イラストやデザインのほか、文筆、写真、作詞・作曲の分野で活躍するほか、俳優としても「何でもござれ」の幅の広さが売りもの。そんな彼が本作では、成績優秀と見込んだ院生の珠が「なぜ人間は存在するのか、何のために生きるのか。これまで学んだ哲学書や研究の解釈も腑に落ちなくて・・・」と悩む姿を見て、一方では「それを考えるのが哲学です」と突き放しながらも、他方では、無作為に選んだひとりの対象を追いかけて生活や行動を記録する“哲学的尾行”の実践を持ちかけたが、それは一体なぜ？

哲学的尾行をするについて、篠原教授（リリー・フランキー）が指示した約束ゴトは、「ターゲットと接触しないこと」だけだから、誰を尾行するのかの選択や、記録されたターゲットの生活や行動の中から、どのような行動をどのように分析し、どのような修士論文を完成させるのかは珠の自由。しかし、刑事や探偵業には不可欠とされる尾行には時間も費用もかかるうえ、それなりのテクニックが不可欠。そのうえ、万一ターゲットに尾行を悟られた時のリスクも相当なものだ。したがって、教え子に「哲学的尾行」を指示するについては、そんな詳細についての指示や打ち合わせが必要だと思うのだが、基本的にぶっきらぼうな篠原教授はそれ以上の説明をしないから、さて、これで大丈夫？そんな心配が生まれてくる。ひょっとしてこの「哲学的尾行」は、篠原が哲学の教授になるについて、自分が実践してきたやり方？もしそうだとすれば、篠原教授は、哲学的尾行をする珠の後を、さらに哲学的尾行をするのでは？そんな疑いすら持ってしまったが、さて、本作に見る珠の哲学的尾行は・・・？

いずれにしても、珠はゲームデザイナーをしている鈴木卓也（菅田将暉）と同棲しているとはいえ、今ドキのごく普通の真面目な院生（？）だが、篠原教授はその雰囲気を見ているだけでも、かなりヤバそう・・・。

<「二重生活」は誰にでもあるが、石坂のそれは・・・？>

人間には善と悪との二面性があり、人間の生活にも二重性があるから、「二重生活」は誰にでもあるのが当然。それは、朝から夕方まで会社で真面目に働く男と、アフター 5 に立ち飲み屋で憂さ晴らしをしている男の「二重生活」ぶりを見ても明らかだ。また、そんな目で自分自身を振り返って考えてみても、自分自身の二面性や二重生活ぶりはわかるはずだ。しかして、珠が「哲学的尾行」のターゲットとして石坂（長谷川博己）を選んだのは、一体なぜ？それが、本作導入部のテーマになる。

珠が石坂を尾行し始めたのは、マンションの隣の一軒家に美しい妻、美保子（河井青葉）と一人娘とともに住む石坂の姿を、たまたま参考資料を探しに向かった書店で発見したためだが、なぜ珠はそんな石坂を哲学的尾行のターゲットに選んだの？たまたま石坂の場合は、編集者として作家のサイン会に立ち会った後、コーヒESHOPで待ち合わせた女しのぶ（篠原ゆき子）とデートして男物の腕時計を受け取ったり、人気のないビルの影で濃厚なキスを交わしたり、という「二重生活」ぶりが顕著だったから、修士論文をまとめるターゲットには最適と思えたが、家庭から会社と立ち飲み屋の二カ所だけを行き来しているだけの平凡な二重生活の男だったら、論文はまとめられるの？

珠がきわめて自然に卓也と同棲生活を続けている姿を見ると、珠の男性遍歴はそれほど豊富なものと思えないから、珠が石坂の二重生活ぶりに興味を持ったのは、ある意味当然。しかし、そんな大人の男、有能な男、石坂への興味やのぞき見趣味と、哲学的尾行とは本来意味が違うはずだが・・・。

<こんな下手クソな尾行では。バレてからの展開に注目！>

全くの素人流で始まった珠の「哲学的尾行」に見る、石坂の「二重生活」ぶりはすごい。弁護士としての私の経験では、妻の美保子が石坂の携帯をチェックすれば、石坂の二重生活ぶりはすぐに明かになるはずだが、スクリーンを観ていると、どうやら美保子は既に夫が愛人のしのぶと食事をしたり、ホテルで逢瀬を重ねていることを知っているらしい。

しかして、妻と愛人の間に立った石坂はある日修羅場を迎えるが、いくら哲学的尾行とはいえ、大学院生に過ぎない珠が素人流のやり方で尾行を続けていれば、すぐにバレてしまうのでは・・・？既にホテルのフロント係からは珠に対して疑いの目が向けられていたし、多少服装を変えても、何度も石坂が珠の姿を目にしていると・・・。その結果、本作後半からは、珠が妻の依頼を受けて自分を尾行していると信じ込んでいる石坂から、珠への追及が始まることに。石坂は自分の背信ぶりを棚にあげて、「お前のおかげで、妻やしのぶはボロボロになった」と主張していたが、珠の尾行の狙いが妻の依頼による浮気調査ではなく、修士論文のための哲学的尾行だとわかると・・・。

『愛の渦』（1 4 年）で門脇麦が見せた大胆な濡れ場への挑戦とあえぎ声の大きさにはビックリさせられた（『シネマルーム 3 2 』未掲載）が、本作でも、哲学的尾行が石坂にバレてしまった後もお修士論文の完成を頼み込む珠の姿と、想定外（？）のラブホテルでの激しい情事の展開にビックリ。若い頃に「子宮作家」のレッテルを貼られて、長く文壇的沈黙を余儀なくされた瀬戸内寂聴原作の『花心』が近々公開されるが、門脇麦を見ていると、この女優には「子宮女優」の呼び方がピッタリ！

<ゴミ捨て場を写すカメラの不気味さに注目！>

人間の生活の安全・安心の要請にカメラ技術の進歩が対応した結果、今やマンションや事務所はもとより、まち中の至るところに監視カメラが設置されている。監視カメラが、いい加減な目撃情報より、よほど確実な犯罪捜査の決め手になるのは当然だ。また、今やバスやトラックにも一台ごとにドライブレコーダーがセットされるのが常識になってきたから、交通事故が発生した場合の事故状況の再現はきわめて容易になっている。

しかして、本作で注目すべきは、珠と卓也が同棲しているマンションの管理人がゴミ捨て場を写すためにセットした監視カメラ。これはゴミ捨てのルールに従わない住人をチェックし、警告を与えることを目的としたものだが、さてその効用は？マンションの管理人のおばさん春日治江役を、かつて1 9 8 0 年度のクラリオンガールに選出された烏丸せつこが演じていることにも驚いたが、その口うるささとゴミ捨てチェック意欲にもビックリ！もちろん、それはそれで大切なことだし、珠たちもその献身的な姿勢には敬服していたが、この監視カメラの効用は本当にゴミ捨ての監視だけ・・・？本作では、珠が哲学的尾行にのめり込む中で、次第に卓也との間にすきま風が吹き、その距離が広がっていくのが大きな皮肉。そして、珠は哲学的尾行によって石坂を監視しているつもりだが、以前とは違って、哲学的尾行のためえらく不規則になった珠の生活は、この監視カメラによって常時監視されることに・・・。

それやこれやを考えると、監視カメラの効用とその社会的役割は明らかだが、その活用による監視体制の強化をどのように考えればいいのか？本作ではそれを暗示するように、ゴミ捨て場を写す監視カメラの姿が何度も登場するので、それに注目！

<修士論文の完成度は？その出来の評価は？>

本作では、ヒロイン珠の哲学的尾行によって、一見エリート会社員であり、かつ良き夫、良きパパでもある石坂が、実はすごい二面性を持った男であることが暴かれていく。したがって、哲学的尾行という手法による人間の考察はきわめて有用だから、それを実践し、分析し、論点を整理し、結論をまとめあげれば、珠の修士論文は素晴らしい完成度になるはずだ。しかし、他方でその出来を評価する篠原教授の二面性も明らかだから、篠原の本当の狙いがどこにあるのかが、本作の展開を見ている限りイマイチわからない。

哲学的尾行をする者を、さらに尾行しているのでは？本作ではそういう疑いが一貫して持たれるだけに、篠原の二面性は明らかだ。さらに篠原が、病院で死を迎えようとしている母親に対して、桃子（西田尚美）を自分の婚約者だと紹介し、そのように二人して装っている姿を見ていると、この男の二面性（虚偽性）が、一層明らかになってくる。

本作ラストには、珠が苦労して完成させた修士論文を朗読する声が聞こえてくるが、さて、その論文が導いた人間についての考察の結論は？また、その完成度は？その採点は？その判断を篠原教授一人に委ねず、あなた自身がきちんと下すことが大切だ。